

四
災害からのコミュニティ復興、伝統的避難場所の再
発見と継承

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 栄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001082

四 災害からのコミュニティ復興、伝統的避難場所の再発見と継承

茂 木 栄

はじめに

東日本大震災の直後から、私たちは伝統的な宗教的景観（主に鎮守の森と神社）が被災を免れ、何もなくなくなった集落の中に、無傷で残っている光景を随所で見てきた。そして、これが何を意味するのかを、その経過を観察し続けることで探ってきた。これにより、震災後、残った神社とコミュニティ復興との推移を見ながら、神社に付随したソフトウェアとしての祭や民俗芸能、行事が大きな力になっていったことを観察することできたのである。私たちは、以上のポイントを中心に、伝統的宗教景観が自然災害から人々を守り、その後の復興の礎になったのかどうかという事例を記述することで、以下の内容を明らかにしようと試みた。⁽¹⁾

(1) コミュニティの復興と伝統文化の継承として、火災を退けた奇跡の社として祭のシステムが被災者を助けた大槌町の二つの小鎚神社（小鎚神社、白澤小鎚神社）など。

(2) 鶴住神社（鶴住居―津波でんでんこ・奇跡と悲劇、供養絵馬など）、重要社叢の現況記録調査、震災シンボルの誕生と聖地化と今後について。

(3) 山田八幡宮神輿修復終了・奉祝神輿渡御祭及び八幡宮神幸祭復活を中心に。

そして、本稿では命を守る山についての現地調査の報告を記すこととした。いのち山伝承（静岡県袋井市の旧浅羽町）と

しては、中新田命山（静岡県袋井市中新田）、大野命山（静岡県袋井市大野）、平成の命山（静岡県袋井市旧浅羽町）―宮城県名取市関上港日和山―各地の日和山の事例（新潟県新潟港日和山、福井県坂井市三国湊日和山、茨城県ひたちなか市那珂湊日和山、三重県鳥羽市鳥羽港日和山、三重県志摩市磯部町小的矢日和山、大的矢日和山）などがある。

これらの事例により、大津波から住民の命を守った森の話、住民の命を高潮・津波から守るために築かれた命山、海と空を観察するための日和山など、災害から命を守る伝統的なシステムがあったこと、また、現代にも生かすことのできる施設と考え方が調査研究を重ねる中で明らかになってきたと考えている。こうしたことから、ここでは、特に命を守る山について注目し、報告する。

遠州灘沿いに点在した命山への注目

静岡県袋井市旧浅羽町には、ヤマ（山）、ツカヤ（塚屋）、ツキヤマ（築山）、タカ（高）、イノチャマ（命山）と呼ばれる微高地がある。『浅羽町史 民俗編』^②によれば、「ツカヤは、松原にあるように屋敷にヤマを取り込み、なお、その上に地の神を祀って生活の安泰を願った屋敷の付設と考えられる。さらに土盛りをして、水害の際にこのツカヤに上って避難生活をおくった。このようなツカヤの発展したものとして、砂山を共同でさらに高くして稲荷などを祀ったものが、大野や中新田に見られる命山であると考えられる」。また、同書によれば、命山は、延宝八年の高潮を契機に横須賀藩の命によって築かれたとされる。

静岡県袋井市中新田には、小高い丘があり、命山と呼ばれるその山の由緒を記した看板が山の登り口に建てられている。その案内板には次のように記されている。

静岡県指定文化財 史跡 中新田命山 かつての中新田大野地区は集落の東側や北側にかけて入江が深く入り込み、



中新田命山 静岡県袋井市（旧磐田郡浅羽町）
中新田

まじさが記録されています。『横須賀根元歴代明鑑』によると、中新田の命山（助け山とも記される）は延宝の高潮災害の後に造られ、その後の高潮では村人全員がこの山に登り、船で対岸の横須賀から食料を調達したり、潮が引くのを待ったことなどが詳しく記されています。形状 中新田の命山は、周りの砂質土の土を盛り上げて築かれました。形状は二段築城の方形で、基底部が東西三メートル、南北三メートルの方形。上段部は東西二メートル、南北二メートルの長方形。高さ五メートルの規模です。大野の命山は粘土質の土を盛り上げて築かれ、形態も小判型というように同じ命山でも両者は異なっています。

二〇〇七年三月二十日指定

高潮の被害を受けやすい地形でした。延宝八年（二六八〇）八月六日に東海地方を襲った台風は、江戸時代最大と言われるほど多くの被害をもたらしました。静岡県内では吉原・大井川・横須賀・浅羽・浜名湖口地方で高潮が発生したほか、江戸、三河国、田原（愛知県東部）西尾、吉田（豊橋）などでも高波と高潮が記録されています。延宝八年から二年ほどの間に書かれたとされる『百姓伝記』には、打ち寄せた波は、横須賀城の中土井の前で止まり、城より南東村々、西の村々は潮浸りになった。中でも東同笠村、西同笠村・大野新田・中新田・今沢新田に潮が強く当たり、この村々で300人が死んだと被害のすさ



大野地区命山 寄木の丘



中新田地区命山 きぼうの丘

現代の命山

袋井市では、旧浅羽地区の命山の伝統を承け、平成二十八（二〇一六）年、二十九（二〇一七）年に津波・高潮から住民の命を守る現代の命山を築造した。

◆ 中新田地区命山 きぼうの丘

平成二十八年三月完成 収容人員400人 天端海拔10メートル。

大野命山（静岡県袋井市大野）には、山頂に稲荷社が祀られている。その案内板に記載される内容は、中新田命山の説明と前半は同一である。そして、大野の命山も中新田命山と同一時期に造られたものと考えられるとし、「静岡県指定文化財 史跡 大野命山」との表題が記されている。そして、「形状 大野の命山は、周りの粘土質の土を盛り上げて築かれました。西側が削られています。形状は二段築城の小判型で、基底部が東西二四メートル、南北三八メートルの方形。上段部は東西一七メートル、南北二七メートルの長方形。高さ三・七メートルの規模です。中新田の命山は砂質の土を盛り上げて築かれ、形態も方形というように同じ命山でも両社は異なっています。二〇〇七年三月二十日指定」とある。



湊地区命山 江川の丘

◆大野地区命山 寄木の丘

平成二十八年三月完成 収容人員3000人 天端海拔10メートル。

◆湊地区命山 江川の丘

平成二十九年二月完成 収容人員3000人 天端海拔10メートル。

これら現代の命山は、非常の防災施設であると同時に、普段、展望台として町の全景空の様子、海の様子などを観察できる、憩いの場ともなっている。

日和山

江戸時代の海運業の発展に伴って、整備された風待ちの港を見下ろす小高い山に、観天望気のため、日和を見るために造られた山である。共通して日和山と呼ばれた。作ったのは、船主である廻船問屋たちであることが各地に残る方位石の刻字からわかるのである。

日和山の役目として、南波松太郎氏によれば、⁽³⁾次の五つの主役目と三つの副役目とがあるという。すなわち、主役目とは、「日和を見ること」、「出船を見送ること」、「入船を望見すること」、「入船との連絡をとること」、「入船の目印となること」、副役目とは、「遊覧場所となること」、「商人の商況判断の資料を得ること」、「唐船見張り番所の設置と砲台の築造」である。

もちろん、一つの日和山でこれらすべてを兼ね備えているわけではないが、絶対の共通条件は日和を見ることであ

り、海の様子、空の様子、観天望気を目的としていた。

石巻市日和山鎮座鹿島御児神社（日和山神社）

石巻では、東日本大震災の津波から、その日和山が多くの人命を救ったという。石巻市は、平成二十三年（二〇二一年）三月十一日の東日本大震災により、死者三七七名、関連死二七六名、行方不明四二八名（令和二（二〇二〇）年十二月末日現在・石巻市ホームページによる）もの犠牲者が出てしまった。

石巻市の最も津波被害が大きかった北上川河口石巻湾一帯を一望できる日和山の山頂の丘に鎮座するのが、式内社としての古い由緒を誇る鹿島御児神社である。震災当日、近隣住民の避難場所として多くの命が救われた場所でもある。CD-ROM『平成祭データ』⁽⁴⁾には、「鹿島御児神社由緒略記」によれば、当社は、延喜式神名帳所載の式内社で、国史現存社として最も由緒深い神社であります」とあり、続けて、「当神社創建の由来縁起について、これを明らかにする史料がありませんが、従前の調査、および史跡・口碑・伝説・社蔵文書の調べによりますと、往古、関東の鹿島、香取の両神宮祖神の御子が共に命を受けて海路奥州へ下向し、東夷の征伐と辺土開拓の経営にあたることとなり、その乗船がたまたま石巻の沿岸に到着、停泊して錨を操作した際、石を巻上げたことから、石巻という地名の発祥をみたのだとの言い伝えがあります。石巻に上陸された両御子は先住蛮賊地帯であった奥州における最初の足跡をしるした大和民族の大先達であり、開拓の先駆者として偉大な功績を残された地方開発の祖神であります。当社は代々、使臣、藩主等の尊崇厚く、社領を寄進し、幣物を贈り、また社殿を修築し、宝物の寄進等あり。明治七年、旧村社に列す。大正十年、旧郷社に列格。昭和十年、県社に列格。当社は勝利の神として職業繁栄を守り、悪疫除けの神、安産の神、鬼門除けの神、海上安全の守護神として、また交通安全祈願の靈驗著しく、その信仰ますます盛んであります。」とある。

また、一般社団法人 石巻観光協会ホームページ (<http://ikankocom/>) によれば、

全国には約80カ所の日和山があり、江戸時代千石船の出入航の日和を見る場所や航路目標の重要な山だったと考えられています。石巻の日和山東南の中腹に「マネキ」（航路を指示する場所）という通称名があったことから、江戸時代に栄えた船運と深い関わりがあると推測されます。この日和山は高さ五六メートル、北上川河口に位置する洪積段丘の孤立丘で、武神を祭る牡鹿十座の二つ鹿島御児神社（窪木家・旧県社）がその頂上に建立され、元来は五月十五日が祭礼の日となっています。社伝によれば、宝亀十一（七八〇）年十二月 陸奥鎮守副將軍・百王俊哲の奏上が鎮座の起源と伝えられ、中世には奥州総奉行葛西氏の城「石巻城」があったと考えられています。文禄二（一五九三）年政宗朝鮮出兵の際、水軍指揮の功績のあった阿部十郎兵衛土佐の奉納した軍配団扇が現在でも同社に残されています。元禄二年には松尾芭蕉と曾良が訪れ、石巻の繁栄ぶりに驚かされた様子が『奥の細道』からも読み取ることができます。江戸時代から桜の名所として知られ、小野寺鳳谷による『仙臺石巻湊眺望之全圖』にも石巻の繁栄ぶりが、パノラマ風に描かれています。大正初期に公園整備され、桜の他つつじで彩られる憩いの場として今日に至っています。吉田松陰・志賀直哉、井伏鱒二、廣津和郎、宇野浩二等も眺望を楽しみ、芭蕉、保原花好、石川啄木、宮澤賢治、斎藤茂吉、種田山頭火、釈迺空、新田次郎、山形敏二等、多数の文学碑や、川村孫兵衛、芭蕉曾良像等の像が建てられています。

と説明されている。海運のための日和山から、近代に入り市民たちの憩いの場として眺望を楽しむ公園として整備されてきた場所でもあったのである。

宮城県名取市関上港日和山

名取市関上四丁目に小高い丘が造られていた。これを日和山と呼び、山頂には忠魂碑と湊神社から遷座された富主姫神社の社殿があった。しかし、東日本大震災の大津波により、すべて流出してしまった。

日和山参道の傍らにあった説明版には、「日和山は、関上漁港への船の出入りを見るためと漁師が気象、海上の様子を見るため、大正九（一九二〇）年に築造された山です。標高六・三メートルの山頂には、富主姫神社の社殿などがあり、地域



名取市関上港日和山

の人々が集う憩いの広場として親しまれてきましたが、平成二三（二〇二二）年三月十一日に発災した東日本大震災による大津波にのみ込まれ社殿が流失、石碑は倒壊してしまいました。山頂に残った木の幹に大津波の爪あとが残っていたことから津波は山頂から二・一メートルの高さまで水位が達したことが推定されます。震災後の平成二五（二〇三三）年五月に現在の社殿が再建され、日和山に多くの人が訪れるようになり、鎮魂の場所としてまた、名取市全体の復興のシンボルとして重要な場所の一つになっています」とある。

また、日和山山頂富主姫神社前に立つ案内板の記載には、「由緒 江戸時代、塩場より製造した塩を幕府に献上するため、船で江戸へ運搬する途中、房州（千葉県南部）沖で遭難したとき、船頭たちが竹生島弁財天に祈願したことにより無事

帰還できたという御利益に感謝し竹生島弁財天を伊藤家（製塩業）に勧請し、塩場近くの沼に弁天島を作り氏神様として祀られたのが始まりとされております。その後も豊漁守護の御利益が数々あり、町中より参詣者が絶えないことから富主島（関上三丁目、宮下橋付近）に御鎮座致しました。伊達藩の貞山運河開堀などを機に一時富主旅館へ御遷座致したのち、明治四二年に湊神社に合祀されました。大正九年関上の住民によつて日和山が築山されると、その山頂へ御遷座致し今日に至つております。平成三年三月十二日の東日本大震災による津波によつて御社が流失しましたが、平成二五年五月に新たな御社が建立され、関上の地を見守られておられます」「ご祭神とご神徳 市杵島姫命を祭神としております。市杵島姫命は宗像三神のうちの二神で、いずれも美人である三姉妹神の中でも、市杵島姫命はとりわけ美しい姫神とされているため、弁才天（弁天様）に見立てられております。開運、商売繁盛、技芸上達、海上安全、航海安全、陸上安全、漁業祈願など地域の崇敬を集めております」「祭礼 五月五日に例祭が執り行われ、製塩にちなみ湯立ての神樂が行われます」との説明がある。

この日和山の築造は新しく、大正九年在郷軍人分会の発起による、人々の勤労奉仕で造成されたという。日和山築造当時と比べると大震災直前の日和山は基壇部分が埋まって二段になっていたことがわかる。現在は大震災犠牲者の鎮魂の場となっている。

新潟県新潟港日和山

続いて、日本海側に目を転じてみよう。新潟港の東堀通十三番町に現在でも存在している日和山がある。標高わずか十二メートルの小山である。

新潟港の歴史は古く、『日本書紀』大化三（六四七）年に、淳足の柵（ぬたりのさく）が置かれたとあるのが、文献上最初の

記録だという（「入船みなとタワー」階説明板）による）。また、延喜五（九〇五）年に醍醐天皇の勅命で編纂が開始された律令格式『延喜式』（延長五（九二七）年完成）に信濃川河口の港「蒲原津」が越後国の国津として記載されたという。「蒲原津」は、京都へ敦賀港を経て貢納物（税）を運ぶための積出港としての役割を担っていた。

新潟津の初見は、東国巡行の京都醍醐寺の僧が記した「永禄六年北国下遣足帳」であるという。永禄七（二五六）年六月二十八日、新潟から蒲原、沼垂をそれぞれ舟で渡っている。新潟津が信濃川左岸、沼垂湊が阿賀野川右岸、両河の間に蒲原津があった。新潟津・蒲原津・沼垂湊は当時三ヶ津と呼ばれた。これが文献に現れる最初の新潟港であるという。江戸の商人河村瑞賢（かわむらざいけん）が幕府の命を受けて寛文十二（一六七二）年、西廻航路を整備する。元禄期（一六八八―一七〇三）の新潟港は、西廻航路の発展する中で、江戸期の全盛期を迎えていた。当時新潟港は信濃川、阿賀野川が河口近くで合流し、水深が深く、出入する大型の北前船にとって良港となっていたという。⁽⁵⁾

越後の米や大豆の集積地として、また奥羽地方から直接京都下関經由で大阪・江戸に運ぶ物資運搬の中継地として、重要な役割を担い、新潟は急速に開けていった。幕末、黒船来航によつて鎖国政策が破られると、日米修好通商条約（一八五八年）により、日本は五港（函館・新潟・神奈川・兵庫・長崎）を開港することとした。この頃から、新潟にも異国船が現れ始め、乗組員が上陸することもあった。開港の指定を受けた新潟港であったが、戊辰戦争の影響などで十年後の明治元年十二月十九日（新暦一八六九年二月二日）の開港となった。同時に緊急避難などのための補助港として、佐渡夷港（両津港）も開港した。

新潟港の日和山の初出は南波松太郎氏（「新潟港日和尚」の項『前掲書』）によれば、享保五（一七二〇）年あたりではないかとの聞き取りをしている。



日和山



山頂の住吉神社

新潟港旧日和山

日和山参道入口に立つ案内板の記述を要約すれば、江戸時代の和船は、雨や風の影響を受けやすい構造だったので、航海には常に危険が伴っていた。そのため、船頭は港に近く見晴らしの良い高台で日和（天気）の良し悪しを見て、出帆を判断しなければならなかった。また、河口に位置する新潟の湊は、「かんぬき州」と呼ばれ、浅瀬がでやすかったため、それを避けるため、船の（水戸）水路を教える水先案内（水戸教）が必要だった。そのため、町の北端にあるこの大地の上に船見櫓を設け、日和や船の出入りを観察していたという。このように日和山は、新潟港にとって「管制塔」の役割を果たす、重要な場所であった。

頂上には、方角を知るための「方角石」、港に入る目印となる「日和の松」、航海の安全を祈願する「住吉神社」の三つの宝が設けられていると記している。日和山には様々な解説説明板が建ててあり、観光と郷土研究の場ともなっている。案内板を参考に、記してみよう。

◆日和山山頂に建つ住吉神社（十二・三メートル）

住吉の神は、海上守護の神である。慶應元（一八六五）年に水戸教を代々務めていた伊藤仁太郎が、自宅に祀っていた住吉の神をここに移し

たのが、神社の始まりとされている。明治十三年の大火で焼失したが、翌年には再建された。（説明板の要約）

◆明治二十四年八月の銘のある方角石

天保二（二八三）年、江戸の絵師・長谷川雪旦の「北国覧」に描かれている方角石は、その後、新日和山に移され、海岸決壊でなくなつたといわれています。現在の方角石は新潟の石工・田中勝五郎の作で、明治二四（二八九）年に池仁平らが奉納しました。また手水鉢は明治十七年に奉納されたものです。（説明板より）

◆日和の松

古くから山頂にありました。長谷川雪旦が新潟を訪れて描いた「北国覧」にも、日和山の山頂に松が描かれています。現在の松が、何代目に当たるかは分かりません。（説明板より）

◆日和山の繁栄

湊だけでなく町中も一望できる高台であつた日和山は、多くの人を引きつけ、新潟でも有数の名所として栄えました。

（説明板より）

◆ランドマークとして

日和山は新潟町の北端に位置し、江戸時代後期までは町で一番の高台でした。明和五（二七六八）年、度重なる長岡藩の御用金徴収に対して、町人たちが一揆を起こします。その時一揆勢が寄り集まった場所が日和山でした。日和山は、湊を出入りする船や新潟を訪れる旅人だけでなく、街に暮らす人たちにとってもランドマークでした。（説明板）

◆住吉神社の日和みくじ

日和とは、むかしは船乗りにとって「順風が吹く好天気」という意味を持っていました。新潟港の日和をみる水先案内（水戸教）発祥地日和山山頂に鎮座する「住吉神社」長年みなとまち新潟の安全を祈願しております。人生の進路の恋愛のゆ

くえを示す「日和みくじ」授与料 一体百円なりという「日和みくじ」が頒布されていた。

福井県坂井市三国湊日和山

福井県坂井市三国町北本町の九頭竜川河口右岸の丘陵の上に建つ曹洞宗の寺、瑞雲山金鳳寺境内が三国湊日和山である。三国の日和山は標高約五〇メートルの高台にあり、三国湊の船の出入りを見て観天望気をおこなった。

金鳳寺境内に設置してある案内板の記述は以下のとおりである。三国湊日和山は、「船の出入りを決めるために、河口の天気模様を確かめたこの高台を日和山と呼んだ。その座に建つ金鳳寺は曹洞宗禅寺。江戸中期には、俳諧に親しむ有力商人たちが吟社を結び、御堂から三国湊の風景を楽しみながら句会を催した風雅の地である。境内には芭蕉翁をたたえた初雪塚や歴代宗匠の句碑、木彫の名人嶋雪斎の墓などが並ぶ。」（みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会・三国湊魅力づくりプロジェクト・越前三国あきない処 平成十七年三月設置）

また、日和山と刻された標柱の横面には「芭蕉の初雪塚を建立し余徳を景仰した所で、日和山吟社由来の地である。」と記されていた。

五月十九・二十日には、盛大な北陸三大祭りと言われる「三国祭」が催行される。かつての三国湊の繁栄ぶりを今に伝え



三国湊日和山

註

- (1) NPO法人社叢学会『いのちの森をたどる―東日本大震災復興支援活動の記録』令和元年所収。
- (2) 浅羽町史編さん委員会編『浅羽町史 民俗編』平成十年、三二―三四頁。
- (3) 南波松太郎『船・地図・日和山』法政大学出版局、昭和五十九年、五七七頁。
- (4) 神社本庁制作CD-ROM『平成祭データ』平成七年。
- (5) 菅瀬亮司・中村義隆・伊藤善允著「新潟港の『みなと文化』」(PDF版)『港別みなと文化アーカイブス』一般財団法人みなと総合研究財団、一頁。



三国祭ポスター

る祭である。

以上、伝統的な海の防災施設としての命山と、海と気象を観察し、時として防災の役割を果たした日和山についての現地調査の一部を報告した。これらの山が、防災の資源となるであろうことを予感しつつ。